

九州情報大学学術研究所報

創刊号 2018年4月

○所報の創刊に寄せて 学長 麻生 隆史

九州情報大学は平成10年に開学し、経営情報学部の下に経営情報学科と情報ネットワーク学科の2学科を設置しています。経営情報分野の進歩は著しいものがありますが、本学としても先端的な教育・研究を实践すべく、常に研鑽を重ねてい

ます。このたび『九州情報大学学術研究所報』の創刊の運びとなりました。この新しい試みが、本学の教育の質の向上と研究の活性化に寄与するものであることを大いに期待しています。

○研究所の活動について

九州情報大学学術研究所は、本学における教育及び研究の充実・発展に資するために設置された機関です。研究所の主な活動としては、学術誌『九州情報大学研究論集』や本誌『九州情報大学学術

研究所報』の編集・発行、学内研究会・講演会の開催等を行うほか、次に掲げるセンターを置き、教育・研究活動を日々行っています。

- | | |
|-----------------|---|
| (1) 経営情報センター | 企業等との共同調査・研究及び情報教育の支援・コンピュータ機器の維持管理等 |
| (2) ベンチャー支援センター | 創業・ベンチャーを目指す本学学生の支援、学外からの起業の相談受け及び産学官連携プロジェクトの受入れ等 |
| (3) 生涯学習センター | 生涯教育推進のための公開講座の開催等 |
| (4) 国際交流センター | 外国人留学生の教育・生活指導及び本学学生の海外研修・留学の指導並びに外国の大学研究機関との学術交流等 |
| (5) 地域情報センター | 地域と大学との連携を図り推進するための、地域の情報収集、地域への情報発信、学生・教員の地域交流等に関する実践的研究・教育活動等 |

(九州情報大学学術研究所規程より抜粋)

○学術研究所活動及び共同研究報告会レポート

「平成29年度九州情報大学学術研究所活動及び共同研究報告会」は、平成30年3月23日(金)午後1時より本学251教室において開催された。まず研究所傘下の各センター長によるそれぞれ特色あふれた活動状況について報告が行われ、次に研究所が所管する今年度の共同研究の状況につい

て、担当者より時宜を得た具体的な報告がなされた。またそれぞれの報告に関して、出席者とのあいだで活発な質疑応答が行われ、終了予定時刻の3時をオーバーするほどであった。以下では、当日行われた報告についてそれぞれの概要をお伝えする。

1. 各センター活動報告

(1) ベンチャー支援センター センター長 遠藤真紀教授

ベンチャー支援センターは、福岡市の経済振興局創業・支援課や経済観光局経営支援課をはじめとして、福岡商工会議所や大学ネットワークふくおか（福岡市）との連携のもとで、地域のベンチャー支援事業や中小企業支援事業に積極的に取り組んでいる。たとえば福岡市の経営支援課（前出）が行う「福岡市トライアル発注認定事業」に評価委員として、また福岡商工会議所の経営安定化特別相談事業に相談員として参画している（いずれ

も遠藤センター長）。全体的に言えばベンチャー支援センターの活動は、創業支援に少し偏っている印象があるかもしれないが、福岡市の状況を見ると創業希望者が多いこともあり、今後とも中小企業基盤整備機構など地域の公共団体などと協力しながら、そうした活動を継続していきたい。また中小企業全般に対する PR 活動なども積極的に行っていきたい。

(2) 生涯学習センター センター長 橋爪善光講師

生涯学習センターは、地域のニーズに即した公開講座や講演会を企画・開催している。平成 29 年度は情報系・経営系・語学系計 12 の公開講座を企画した。そのうちで 7 講座は学生が講師・サポーターとなり、テキストも学生手作りのパソコン講座であった。同講座については昨年度よりも全体的には受講者が増加しており、アンケート結果によれば不満という回答はなく、総じて満足度

は高かった。このほかに生涯学習センターは、地域情報センターが企画・実施している「甬島アイランドキャンパス」（鹿児島県）のストレッチ講座に陸上部学生を講師として派遣、さらに太宰府市立水城小学校パソコンクラブへ学生をサポーターとして派遣している。生涯学習センターとしては、今後もこのような企画を積極的に実施する予定である。（※この報告の詳細は下記を参照のこと。）

(3) 国際交流センター センター長 全 彰煥教授

国際交流センターは、太宰府市国際交流協会のメンバーとして地域に根ざした様々な活動を行っている。たとえば同協会が主宰するイベント「フレンズ倶楽部メンバーの集い」、「冬の大運動会」（いずれも市民と在留外国人の交流が目的）に本学留学生（計 49 名）を派遣し、地域の国際交流に貢献している。また留学生の生活上の様々な問題を共有し解決を考えていくイベントして、同協会が開催する「留学生フォーラム」に本学留学生を参加させている。ちなみに今年度の内容は留

学生の就職支援セミナーであった。

国際交流センターは、留学生の日本語補習教育に関して本学における中核的役割を担っており、ベトナム人新入生や DDP（ダブルディグリープログラム）編入学生に対する特別のカリキュラムを編成して、個々の日本語能力に応じた授業を行っている。

今後も地域の国際交流に貢献し、そして留学生の教育のために自分たちの役割を果たしていきたい。

(4) 地域情報センター センター長 平田 毅教授

地域情報センターは、主として「甬島アイランドキャンパス」への学生参加、太宰府市立水城小学校パソコンクラブへの学生サポートの派遣、という企画をいままで推進してきた。平成 29 年度の「甬島アイランドキャンパス」には、本学学生など総勢 19 名が参加し、現地での交流実践授業

を実施し、運動会に参加・お手伝いを行うなどして島民との交流に努めてきた。

水城小学校パソコンクラブに対する協力の内容は、同クラブの児童によるパソコンを使った自己紹介カード作りやカレンダー作りなどを本学学生がサポートするものであり、平成 29 年度は就職

課程履修者など延べ 26 人の学生を派遣した。
これらの活動を通して、学生の自主的・主体的な意識や活動が培われていったことは意義深い成

果であったと言えよう。(※この報告の詳細は下記を参照のこと。)

(5) 経営情報センター センター長 車 炳玘教授

平成 29 年度の活動として、1.授業改善アンケートシステムの修正、2.授業理解度確認システムの

修正について、資料に基づき報告があった。

2. 共同研究報告

「アクティブラーニングを通じた地域連携型フィールドワーク活動の取り組みについて
—ソーシャルメディアを利用した南阿蘇からの熊本地震被災状況情報発信の試み—」

秋吉浩志准教授（報告者、代表者）、岸川 洋教授、橋爪善光講師

(1) 研究の背景とねらい

報告者（秋吉）は、平成 28 年熊本地震の被害にあった南阿蘇地域をたびたび訪問して、被害状況を視察し現地住民と面談する機会を持ったが、その経験のなかで、現地の情報発信を継続的に行うことの重要性を強く感じた。そのため的手段として、投稿動画、ブログ、掲示板、ツイッターなどソーシャル・ネットワークング・サービス（以下、SNS）が大いに有用であることが事前の調査で分かった。

報告者のゼミナール活動では、USTREAM 等のクラウドネット生配信活動を活用した情報発信について、学外の諸団体と連携しつつ実践を重ねてきた。こうした経験を南阿蘇被災地域の情報発

信に役立てたいと考えている。つまりに学生とともに被災地に赴き、現地の状況に触れ、住民の方々にヒアリングを重ねて、まさに“生の情報”を SNS で発信するということである。そしてこのようなアクティブ・ラーニングを通じた実践的な地域貢献および社会貢献活動が、学生の社会力・人間力養成、言い換えれば実践的なマネジメント力、情報発信のスキル、コミュニケーション力、やり遂げる力の向上にどれだけ有効性があるのか検証を行うことがこの共同研究の主眼とするところである。なお本研究はまだ端緒にすぎたばかりであることを断っておく。

(2) 研究のアウトライン

本研究では、次の三つの内容を踏まえた実践型学習を南阿蘇被災地域で行うことにより、学生に及ぼす効果を検証していく。

①サービスラーニング：能動的に地域に関与し、それまで知識として学んできたことを実際のサービス体験に活かし、また実際のサービス体験から自分の学問的取組や進路について新たな視野を得

る。

②伝達ボランティア：現地の「今」の情報を SNS などでもまかく現地から発信。

③プロジェクト型学習：自分で目標にあわせて、発信内容を企画・計画および完成させたり、システムやモデルを構築。就職活動や卒業後の進路に生かす。

(3) 活動実績・予定

平成 29 年度は報告者のゼミナール所属の学生や本学写真部の学生とともに、「阿蘇郡大津町種芋収穫ボランティア」(5月20日)や「第2回かわはら復興祭り支援活動」(8月26日)、「南阿蘇の現状を語る会」(2018年3月5日)に参加し、被

災地の情報発信のニーズ等について現地住民からヒアリングを行った。

平成 30 年度は南阿蘇の地獄温泉・垂玉温泉が主宰する「震災ツーリズム会議」、そのほかの催事に参加し、現地にてネット放送を行う予定である。

(4) 今後の課題

今後も学生とともに南阿蘇の被災地域へ訪問し、SNSを活用した現地からの情報発信を定期的・継続的に行っていきたい。報告者の感触としては、現地に赴き被災者の生の声に触れたことで、学生の意識や行動がより積極的で自発的なものへと変わっていったようである。したがってこの実践型

学習を通じて、学生が大きく成長していくことが期待される。また南阿蘇で得た研究・学習成果を、本学の地元である大宰府の情報発信のプロジェクトにも活かしていくことも検討したい。

(※本研究は、九州情報大学学術研究所共同研究規程に基づき行われたものである。)

3. 今年度の研究所の活動をふり返って、そして次年度へ向けて

学術研究所 所長 坂上 宏教授

以上の通り各センター長や共同研究担当者から大変意義深いご報告をいただいた。なお共同研究は、「学生の主体的学習と学修支援についての研究」をここ数年の共通テーマにしており、このたびの秋吉准教授の報告は、このテーマを踏まえつつ、さらに本学の教育・研究の特色を具体的に示すものとして重要であるとする次第である。

この報告会の最後として、センター以外の研究所の活動をふり返っておきたい。そして次年度の課題についても若干ながら申し上げておく。研究所の主な活動のひとつに、学術誌『九州情報大学研究論集』の編集・発行があげられるが、予定通りこの3月(平成30年)に第20巻の刊行の運びとなった。執筆者および編集委員の労を多としたい。今年度に新たに取り組んだものとしては、第一に研究論集関係の諸規程の整備である。従来の同規程は本学の学則・規程体系全体の中で明確に位置づけられておらず、また査読や執筆上の倫理規範についての文言もなかった。したがって今般の規程改正ではこれらの点を条文として明確に示した。第二に『九州情報大学学術研究所報』(本誌)

の創刊である。本誌の役割は、研究所の活動を社会に広く知らせることにあるが、加えて本学教員それぞれの教育・研究成果を発表する場でもある。今後、『研究論集』とともに本誌が着実に刊行できるように努力したい。

次年度の課題としては、まず研究の全学的な活性化ということである。残念ながら本学における研究の現状はあまり活発であるとは言えない。たとえばこのたび刊行された『研究論集』では、掲載された原稿が3本であったことがそれを示している。各教員に対しては、『研究論集』や本誌、そして毎年3月に行われているこの研究所主催の報告会を活用して、研究成果を積極的に発表するように呼びかけていきたい。次年度のもうひとつの課題は、センター組織の改革ということである。これは先般、麻生学長が、研究所の各センターの活動がややもすると研究面よりも教育・学習面に傾斜しているのではないかと問題提起されたことに端を発している。今後は学長の方針を踏まえつつ、研究所とセンターのあるべき姿について全学的な検討を進めていく所存である。(了)

○大学と地域社会のきずなを結ぶセンターの活動

大学に課せられた使命のひとつは、教育・研究成果を社会に積極的に還元していくことであろう。その意味において各センターの活動は、大学と地域社会のあいだの“架け橋”となるものである。

以下において、生涯学習センターと地域情報センターのセンター長が、地域社会との連携の様子をそれぞれ詳細に報告する。

1. 生涯学習センターの活動報告 センター長 橋爪善光講師

生涯学習センターでは生涯学習推進のため、公開講座を中心に、広く地域のニーズに即した各種公開講座や講演会などを企画・開催している。これらの講座などを通して、本学の研究・教育の質的な向上を図るとともに、本学が蓄積する研究・教育の成果を幅広く地域の教育・文化の発展・向上のために還元し、社会貢献に期することが主な目的である。今年度も昨年度の活動を踏襲し、公開講座を中心とした取り組みおよび地域情報センターと連携した本学学生の派遣を行った。

表1に今年度企画した公開講座一覧と受講者数の表を示す。公開講座では情報系の講座を8講座、経営系1講座、語学3講座を企画した。しかし、経営系1講座および語学3講座には参加申し込みがなかった。受講申し込みがなかった要因の1つとして受講料が高額であることが考えられる。近隣で実施されている同様の講座が無料や数百円であった。それに対して本学の公開講座は経営系2,500円、語学1,500円であった為に受講申し込みがなかったと考えられる。一方で、情報系講座8講座中1講座は昨年より申込者が8名減ったが、7講座においては昨年比1.2倍から2.3倍の参加申し込みがあった。7講座はいずれも学生講師によるパソコン講座であった。学生が講師・サポートを行い、講義で使用するテキストも講師の手作りであるのは、本学の公開講座の特色であるが、このような講座が地域のニーズに応えるものとなっている結果、受講者の増加につながったと考えられる。実際、受講者アンケートでは全講座において全受講者が満足されており、不満の回答はなかった。満足したポイントとしては大きく分けて3点記述されていた。1つ目は手作りのテキストが大きな字で詳しく分かりやすい点や、次に授業の進度がゆっくりである点、最後にサポートによるマンツーマン指導が安心感と分かりやすさを提供していた点が挙げられていた。

学生講師による公開講座の目的の1つには本学学生の成長という点もある。今年度は受講者の満足度を高め、学生のさらなる成長を促すために、新たに2つの取り組みを行った。1点目は4年生の講師経験者による講師指導役を任命した。新たに講師をする下級生の抵抗感・不安感の軽減やよりよいテキスト作りの為だけでなく、指導する側の学生にとっても他者の作成したテキストを修正・指導することによって、さらなる成長が期待されると考えた。そして、このようなシステムを構築することで、今後公開講座の担当教員の力量によらないパソコン講座の質の確保ができると考えた。2点目は授業の全サポートを集めてのリハーサル授業を行った。これまで授業直前にサポートは講義内容を知ることが多かった為、サポートの意識として講師頼りでの授業が多かった。しかし事前にもリハーサル授業をすることで、全員で授業を構築するという意識付けや、講義中も講師とサポートの双方向の意思疎通を通して円滑な授業を構築しやすくなることを期待した。またサポート自身、操作方法の不明な点を排除することによる受講生の満足度アップを期待して取り入れた。これらの新規取り組みが直接今回の受講生の満足度に繋がったかは不明であるが、来年度以降もこれらの取り組みは継続したいと考えている。

生涯学習センター登録学生の派遣では、水城小学校へ継続派遣を行った。また今年度新たに甕島の運動会におけるストレッチ講座を登録学生の陸上部を講師として実施した。運動会において従来は準備体操と整理体操時にはラジオ体操を全員で行っていた。今年度はラジオ体操にプラスして普段から簡単にできるストレッチ講座を5分程度実施した。高齢者の転倒予防は社会生活の維持という観点からも生涯学習という観点からも重要な課題である。高齢者が多く、また中学校までしかない甕島での大学の知を提供する出張講座を開くこ

とは社会的な意義が大きい。運動会参加者のアンケートでも、単純にストレッチが出来てよかったという回答だけでなく、もっと時間を割いて詳しく教わりたいなど大学の知を求めていると感じられる回答があった。来年度以降も地域情報センターと連携した本学学生の派遣を継続したいと考えている。

本センターとしては、来年度も今年度実施した公開講座および学生派遣の取り組みは継続して続ける予定である。ただし、今年度受講希望者が 0

名であった経営系および語学系講座については受講料の見直しを行う。このことにより、周辺地域のより多くの方に受講していただける公開講座を目指す。また、受講生のアンケートで要望としてデジカメや写真の加工、チラシ作りの講座やスマホの講座があったらよいという声があった。本学には写真部もあるため、そのような学生の活躍の場として来年度新規講座を設けられたらと考えている。

表 1 2017 年度公開講座実績.

種別	講座名	月 日	時間	受講者数	昨年人数	昨年比
情報	はじめてのパソコン① ～基本操作編～	9月5日	10:00-12:00	16	7	2.3
	はじめてのパソコン② ～インターネット編～	9月5日	13:00-15:00	17	8	2.1
	はじめてのパソコン③ ～ワード前編～	9月12日	10:00-12:00	19	13	1.5
	はじめてのパソコン④ ～エクセル前編～	9月12日	13:00-15:00	19	12	1.6
	はじめてのパソコン⑤ ～ワード後編～	9月15日	10:00-12:00	17	14	1.2
	はじめてのパソコン⑥ ～エクセル後編～	9月15日	13:00-15:00	17	13	1.3
	ロボットを動かそう!!	11月12日	10:00-12:00	4	6	0.7
	ワードとエクセルで年賀状を作ろう!!	11月15日	13:00～15:30	6	4	1.5
11月21日		9:40～12:10				
11月27日		15:00～17:00				
経営	中小企業のための経営戦略セミナー	8月25日	10:00-12:00	0	0	-
語学	ハングル講座(はじめての韓国語)①	9月13日	10:00-12:00	0	1	0
	ハングル講座(はじめての韓国語)②	9月20日	10:00-12:00	0	1	0
	ハングル講座(はじめての韓国語)③	9月21日	10:00-12:00	0	1	0

2. 地域情報センターの活動報告 地域情報センター センター長 平田 毅教授

はじめに

地域情報センターは2012年度開設され、この6年間、甑島での「アイランドキャンパス」の取り組みと、地元太宰府の水城小学校「パソコンクラブ」への学生サポートの派遣の二つを柱として、取り組みを推進してきた。センターとしては、地域交流・地域貢献に本学の人的・知的資源を活用し

つつ、そこに参加する学生がそれらの活動を通して諸能力の向上を図るという目的のもと、これらの事業に取り組んでいる。

以下、二つの柱それぞれについてその概要をまとめる。

(1) 甑島「アイランドキャンパス」の取り組み

鹿児島県薩摩川内市・甑島での「アイランドキャンパス」事業の展開は、今回で6年目となった。この6年で延べ66名の学生が参加している。今年度の参加者は学生15名、教員2名、卒業生2

名でこれまで最多であった。その中には複数年にわたって参加し、この「アイランドキャンパス」の中核を担う学生も育ってきている。

本年度は昨年度を踏襲した下甑島・瀬々野浦での

運動会参加・チャンコ鍋の提供を通じた交流（今年で5年目）に加え、鹿島小学校の運動会に参加、および海星中学校での吹奏楽・音楽を通じた交流実践授業の二つの交流場面が新たに加わった。また、生涯学習センターと連携して、公開講座人材バンクに登録している陸上競技部の学生の参加も得た。今後の公開講座に学生のスポーツスキルを活用した講座開設のための試行も兼ねた参加であった。

甑島は、「島立ち」（高校不在のため中学卒業生の殆どが島を出て自立する）によって若年世代人口が極端に少なく、特異な形で少子高齢化と人口減少が著しく進行している。そうした甑島において、本学の交流事業は、「交流人口」「関係人口」増加に貢献する恒例のイベントとして定着してきている。

また、今年は、鹿児島県甑島振興協議会より3年ぶりの助成を受けた取り組みとなったため、十分な財政的基盤のもと、参加者全員が一致団結して、甑島での交流実践プロジェクトを成功に導いていけたと考えている。学生にとっても、島民にとっても、共に有意義で充実した交流親睦の場となった。参加する学生一人ひとりが、それぞれの場面で「自ら考え、自ら行動し、楽しみ、そして自らが成果を出す」という主体性をこのプロジェクトへの参画を通して達成していったと確信している。

こうした甑島との、とりわけ瀬々野浦地区との累年的な交流は、様々な意味で有意義性を保持しており、今後とも継続していくことの意味は大きいと考えている。参加した学生のほとんどすべてが「また行きたい」「来年も参加したい」と言う。また、そうした学生が次の年には活動の核となって主体的に取り組んでくれる。学生達はさまざまな場面でそれぞれの役割に懸命に取り組んでくれた。そのことが彼らの充足感や達成感をもたらした

てくれているのだ。こうした成果の多くは、島の人たちとの出会い、仲間との出会い直し、つまり、「出会い」こそが、学生達にそれらをもたらしてくれたのだと確信している。とりわけ今年度は、様々な領域で学生の自主的・主体的な活動が多く見られたのが嬉しかった。甑島での活動は学生の主体性を育ててくれる場としてしっかりと機能している。

これまでの本学の「アイランドキャンパス」の試みは、学術的なものというよりも実践的な内容で構成されてきた。それは、「甑島」と本学の学生（留学生）たちとを会わせたいという、初年度からの私の願いから出発している。なんとか学術的な要素を核に「アイランドキャンパス」を構成しようと、焦った時期もあったが、いまではこの6年間の取り組みは間違っていなかったのではないかと思えるようになってきた。予定調和的で淡いままだった学生達への期待——「甑島」の自然や町並みやそこに暮らす人々との出会いは、きっと学生達になにもものかをもたらすのではないかという淡い期待——も、6年に亘る取り組みを経て一つの実を結んできたようにも思われる。学生達は、単に「甑島」という鹿児島県の島を認知したというレベルをはるかに超えて、「甑島」での感動や出会いをその時だけで終わらせずに、自らの卒業研究や学園祭の取り組みにも繋げている。「甑島」が単に「好き」というに留まらず、特別な場所＝大学生活のひとつの原風景として、学生達自らの成長の軸となっていくなれば、この上ない幸せである。

今後私たちはこの島を舞台に何をするのか、何がしたいのか、これからも楽しい模索の日々はまだまだ続く。

今年度のスケジュール

- 9月29日（木）出発～夕方 串木野からフェリーで下甑島へ
- 9月29日（金）島内観光(1)
海星中学校で交流実践授業
音楽（吹奏楽）、部活（陸上競技）
- 9月30日（土）鹿島小学校運動会に参加・お手伝い
サンセットバーベキュー
- 10月1日（日）瀬々野浦・西山地区運動会に参加
（相撲部特製ちゃんこ鍋を提供）
陸上競技部：準備運動・整理運動のサポート
相撲部：相撲の演武・アトラクション
吹奏楽部：昼休みに演奏会
運動会の打ち上げに参加
- 10月2日（月）島内観光(2)～帰途

(2) 水城小学校「パソコンクラブ」へのサポート学生の派遣

太宰府市立水城小学校の「パソコンクラブ」(月曜日 6 時間目) への学生サポーターの派遣は、太宰府市教育委員会生涯学習課(当時)の要請により 2013 年から実施している。今年度で経 5 年となった。

初年度は、小学校・本学とも児童支援のあり方をめぐって模索の状態であったが、3 年目から参加学生達が立案・実施の主体となってクラブ時間の運営を任されるようになった。それに伴って、学生の参画主体としての自覚も育つようになってきたように思う。

この事業は、生涯学習センターと連携した事業でもある。同センターの人材バンク登録学生に依

頼して毎回学生を派遣している。その際、教職課程履修者に重点的に声をかけ、彼らの教育実習の事前事後学習としての意味も持たせるようになってきた。

今年度サポーターとして派遣された学生は延べ 26 人(12 回派遣)。活動内容は、パソコン教室の小学校向け学習ソフト「ジャストスマイル」を活用した活動である。全体進行をする学生と、児童のつまづきをサポートする学生とに役割を分担し、児童一人ひとりに寄り添うサポートを行っている。

サポート学生の確保と世代交代の円滑化と、活動内容の充実・創意工夫が今後の課題である。

日程	活動内容	児童数	学生数	日程	活動内容	児童数	学生数	
1	4/24	クラブ開き	-	8	11/20	年賀状作り	23	3
2	5/ 8	自己紹介カード作り	24	9	11/27	年賀状作り	24	3
3	6/19	自己紹介カード作り	21	10	12/11	タイピング練習	22	2
4	7/10	自己紹介カード作り	22	11	1/22	プレゼン作り	18	2
5	9/11	カレンダー作り	23	12	2/19	プレゼン作り	23	3
6	9/25	カレンダー作り	24	13	3/ 5	プレゼン発表	21	2
7	10/23	カレンダー作り	24			延べ合計		26

◆原稿募集

教員各位の教育・研究活動に関する原稿を募集します。たとえば教育・研究報告、学会報告、書評、文献紹介、翻訳などです。『研究論集』に掲載するほどの分量はないが、論文執筆のための準備作業として書き留めておきたいこと、日頃の教育・研究に関連して思うことなどでも結構です。

ただし『研究論集』との違いを明確にするため論文は掲載しません。また原稿の学術的水準について一定の配慮をしてください(引用ルール・モラルの厳守、参考文献の明記。レジメやパワーポイント資料にかたよったものは掲載しません)。詳細は学術研究所までお問い合わせください。

九州情報大学学術研究所報 創刊号
 発行日 平成 30 年(2018 年) 4 月 1 日
 発行所 九州情報大学学術研究所編集委員会
 〒818-0117 福岡県太宰府市宰府六丁目 3-1
 TEL 092-928-4000
 ※掲載された原稿の著作権は本学に帰属します。